

〈翻訳〉

A Song for Every Season (5)

湯 山 健 一

【9月】

「さてさて、収穫のときを迎えりゃ心も浮かれ
 小鎌や三日月鎌や大鎌を、手に手にみんなで刈り取りへ。
 世話した小麦がすすくすく育ちや
 直にこの忙しい日々も終いよ。
 みんな総出で祝いの宴だ、収穫祭さ。」

「きびきび働くイカしたあいつ (Brisk and Bonny Lad)」

収穫した小麦を、冬ごしらえのため村の内外に点在する容量の大きな寄棟造 (high-hipped) [訳註屋根が四面に分かれた四柱造り (hip roof)] の納屋へ運び込んだり、切り株だらけになった畑の隅に藁山を積み上げていく作業は、当時まだ馬に荷車を曳かせて行っていました。たとえほんの僅かな時間であろうとも、好天に恵まれればその機を逃してはなりません。何しろ500エイカーもの小麦畑の刈り取りを、天候が崩れないうちに済ませてしまうのは至難の業でしたからね。

大人もこどもも、男たちは皆この作業に借り出されましたし、村中の馬と荷車が掻き集められました。早朝、これだけの数の一団が勢揃いして農場から畑へ収穫に向かう光景は、まさに壮観でした。午前6時にはもう、村の広場 (village green) [訳註村の中心にある St Margaret's Church の前にある草地で、現在もここで祭りなどが催される。] から200ヤード圏内にある方々の厩舎の馬方たちが、すでに馬への餌やりを済ませ、ブラシをかけ、装具を

付けて、これから始まる長い一日の仕事へ向けて準備万端の状態です。どの厩舎からも、大きな身体を揺らしてゆっくりと歩みを進める荷馬車馬が、重い蹄鉄を履いた蹄ひづめで丸石舗装の坂道を各々踏み鳴らしながら滑り降りるように広場へ集まって来ます。厩舎の壁に建て付けられた飼葉桶には水が溜められていました。馬たちは、その苔むした飼葉桶から滴るほどたっぷり口に水を含んで喉を潤すと、向かいにある荷車小屋へ連れて行かれ、その日の仕事に取りかかります。あちこちの農場から大勢集まってきましたから、彼らは縦一列で道を進みました。長い行程の道すがら、教会の前を通り過ぎると、朝の空気はひんやりと井戸水のように澄み切って、向かいの池で白いアヒルが数羽、頭を翼うずの下に埋めてまどろ微睡む姿など、あたかも5月の頃、道端の水たまりに静かに浮かぶ花びらのようでした。

チリンチリンという金属音や、荷車の軋むキーキー、ギシギシという音など響かせながら、隊列は村を南進していきます。30頭を超える馬に、こどもたちを含めれば50人以上にもなる男たちが、沢山の荷車や放下車を引いて列になると、ちょうどハイ・ストリートと同じ長さになりました。この目抜き通り界限では、寢室のカーテンがまだ固く閉ざされていて、眠れるあきんど商人たち、いわゆる「下町っ子 (down-streeters)」[訳註]教会以南の海沿いへ続く High Street 近辺に暮らす人々。対照的に、農夫の多くは教会の北に暮らしていた。] たちは、この騒音を耳に入れまいと、布団のなかに頭まで潜り込んでいました。崖の縁からわずか数フィートしか離れていないところも少なくない海岸線の道まで出ると、半マイルほど沖でロブスター漁を行っている船から、水面を伝って男たちの声が聞こえてきます。海底に仕掛けた罟籠を引き上げ、懸かった獲物を集めながら彼らは唄います。

「日差し目映い夏の朝、なんと心地好くまた喜ばしいことか
野も谷も小麦で埋め尽くされ
暁の頃、青々と葉の生い茂る小枝という小枝に

クロウタドリやツグミがさえずり
ヒバリがこの上なく美しい歌声を聞かせてくれたなら。』*¹

訳注*¹ 民謡「歓喜の極み／水夫と恋人 (Pleasant and Delightful/A Sailor and His True Love)」。Sussex では George Townshend の歌唱などで広く知られる。

長い一日はもう始まっていました。そして、太陽が天空に目一杯大きな弧を描いて西の丘の稜線と風車の向こう側に沈み、夜霧のなか、今度は東にオレンジ色のランタンのような中秋の名月が間断なくぐんぐん昇ってくる頃になってようやく、村の目抜き通りに、仕事を終え疲労困憊の一団が再び姿を現し、とぼとぼ家路につくのでした。パーク・プレイス [訳注High Street 中心付近西側のかつての呼称]にある小さな礼拝堂の開いた窓からは、会合に集った少年禁酒団 (Band of Hope) がこの時節にうってつけの「麦束を運び込もう (Bringing in the Sheaves) [訳注Knowles Shaw (1874) 作のアメリカのゴスペル・ソング]」を唄う、熱のこもった歌声が聞こえてきました、黄昏時に教会の裏手にあるフrint石で造られた古い建物まで馬たちを繋ぎに戻ってくると、薄暗がりのなか、歌を伴奏するオルガンの低音が辺りに響き亘っていました。次の日曜日に行われる収穫感謝祭へ向けて、合唱隊が賛美歌の練習を行っているのです。微かに聞こえる合唱隊の歌声に合わせて唄い始めた馬方は一人や二人ではなかったでしょう。

「…すべて無事に刈り入れた
冬の嵐の来る前に」*²

訳注*² イングランドで広く唄われる収穫感謝祭賛美歌「来たりてうたえ(来たれ、感謝の思い溢る人々よ、来たれ) [Come, Ye Thankful People, Come]」の一節。Henry Alford (1844) 作。

一年の農事も一巡りして、いよいよ終わりを迎えようとしています。

〔訳者補記 私の父〕 ジムの手記にはこう記されています。

さて、収穫のときにや、組を4つ作ったもんだ。それぞれ馬が6頭、荷車が3台、馬方が3人、見習い小僧が2人。小僧のひとりには〔訳者補記 麦束を荷車に放り込む〕ピッチャー (pitcher)、もうひとりには待機役 (stand-fasting) で、刈り束の置かれた場所へ一つひとつ順に前列の馬を曳いて行くのが仕事よ。もし荷車が一杯に積み終わる前に別の荷車が空で畑に戻ってきたら、そいつがそっちの馬を刈り束のところへ連れてって麦束を荷車に放り込みはじめとくのみさ。それから、藁山積み (stack-builders) って仕事もあったな。藁山の上に男が二人。そこへ馬方が荷車に積んできた藁束を次から次へと放り投げるわけよ。一組に大人が7人こどもが3人っていう面子で、一日一山ってのが目安だった。荷車20台分よ。それ以上デカく積むことはなかった。冬になったら脱穀のために納屋に運び込まなきゃならなかったからさ。20台分ってのが、日の高いうちに運び込めるちょうどいい量だったし、乾いた状態で納屋へ持ち込むにもぴったりの分量だった。これが収穫期の最初の作業さ。村の納屋のうち2つを小麦の束で満杯にした。で、麦が水気を含んで運べないとか雨が降ったなんてときは、〔訳者補記 畑に積んだ藁山の麦じゃなくて〕納屋にしまっただけの乾いた方の脱穀をしたのみさ。

藁山はいつも畑のなかか、そうでなければ草地や家畜を追う農道なんかで作ったが、そんなときゃ必ず小高いところを選んだな。天気の良い日でも降ろしやすいからよ。

小麦の藁山は直径が7ヤードぐらいの円形に、オート麦のときは縦横それぞれ8ヤードと5ヤードの四角形に、前にも書いたとおりそれぞれ荷車20台分でこしらえた。〔訳者補記 円形の藁山を〕作るにや、ちょっとしたコツがいてよ。まず13台目までの藁束はまっすぐ縦置きにしていくのよ。まあちょいと外側へ裾の広がった感じかな。で、14台目の藁束で輪っかを作るのよ。「輪になるように置いていく」この工程は、積んだ藁山から6インチほど離れたところに、〔訳者補記 あたかも枠となる煉瓦を積むように〕円状に藁束を置いていくってもんさ。この上に、茅草かやぶき屋根ひさしの庇ひさしみたいに藁束を積んでって、それから上手いこと内側を埋めて、で、

残りの6台分で屋根を作って行くって寸法よ。

収穫作業の報酬はビールじゃなくて、藁山作りの酒代 (haying beer money) ってことで現金が支給された。朝6時から夜8時までの作業さ。午前10時から10時半まで半時間の軽食 (lunch) 休憩、午後は1時から2時までが昼食 (dinner) 休憩、5時から5時半までビールかお茶付きの軽食 (bate) [訳注 = bait (Sussex dialect)] 休憩だったから、都合12時間の労働で、一日当たり2シリング4ペンスの給金と酒代1シリング8ペンスの、合わせて4シリングになった。だが、オレたちやその日の給金だけ受け取って、酒代の方は貯めといて刈り入れが全部終わったときにまとめて受け取ったから、収穫期だけで2ポンドか3ポンド貰ったもんよ。でも、もしバインダー [訳者補記って機械] を操作して収穫に当たってたら5ポンドか6ポンド貰えただろうな。

収穫作業も最後の日を迎え、村中の納屋が麦で一杯になり、入りきれなかった麦もしっかりと畑に山積みされると、作業完了を祝して [訳者補記文字通り大騒ぎの]「ホラリン・ポット (Hollerin' Pot)」もしくは「^し締め^の麦束 (Last Load)」と称される祝宴が催されました。一番最後の馬車の荷台には、かたちばかり収穫された麦がわずかに2層だけ積まれ、荷台の四隅の柱の間には何枚もの旗や万国旗が飾られ、風に膨らんで彩りを添えていました。私の父は、かつて祖父が農場管理人 (bailiff) を務めていたときと同じように、「前方 (for'ard)」の馬の背に姿勢良く背筋を伸ばして腰掛けていました。この荷車は、4つの厩舎から1頭ずつ最高の馬を集め、車の前に2頭ずつ2列並べた四頭立てで曳かせました。それぞれの馬の傍らにはいつも面倒を見ている馬方が付き添い、[訳者補記父の跨がる馬以外の] 3頭の^ひ曳き馬の背にはそれぞれ少年が腰掛けていました。この荷馬車の荷台には、ときには40人を超すほどの農夫たちがよじ登り、今年最後の意気揚々たる祝いの旅路を村の方へと進めて行きました。その後ろには、他の荷車や、手押し車に馬たちが続きました。ハイ・ストリートを抜けて南端の交差点に差し掛かると、隊列は道を横切って海の方へと下り、崖の縁まで進むと、馴染みの [訳者補記バブ、] ホ

ホワイト・ホース（White Horse [訳註 現在も海岸沿いの崖の上で飲食店を備えたホテルとして営業している。]）の前で歩みを止めます。ここで父は、大きな声でこんな風に雄叫びを上げるのです。

「土を耕し、種を撒き、
 麦を刈り取り、藁山作り、
 ついに最後の麦束運んだ
 そうさ、オレたちや投げ出すことなくやり切ったんだ。
 さあ、さあ、そ〜れ」

すると、サセックスの男たち50人の喉から、一斉に大きな歓喜の声が上がります。首尾よく仕事を成し遂げ、ついに終わりの時を迎えた彼らの喜びの声は、この谷間たにあいの村の隅々にまで響き渡りました。[訳者補記 ホワイト・ホースの]店主が従業員を従えて顔を出し、全員に行き渡るようたくさんのビールを振る舞って場を盛り上げてくれます。まずは店主の健康を祝して乾杯し、その後、「鋤引きを後押ししてくださった神様に感謝を（God speed the plough [訳註 農夫たち定番の乾杯の発声。同名の hornpipe は現在もイングランドで広く演奏されている。]）」、「鋤の刃を錆び付かせぬよう、いつまでも働けますように（May the ploughshare never rust) [訳註 同上。Copper family は代々、一年の農事を謳った“The Ploughshare”という歌の最後にこの発声を入れている。]」など、様々な言葉を添えて祝杯が上げられると、誰からともなく「きびきび働くイカしたあいつ」など収穫期に纏わる皆のお気に入りの歌が始まるというのが、いつも変わらぬこの場の流れでした。

この歌声を聞きつけると、村のハイ・ストリート沿いに暮らす人たちは、扉を開け、戸口に立って男たちの隊列が戻ってくるのを待ちます。このあと何が起こるのか、みんなわかっているからです。彼らが家の前を通り過ぎると、村人たちは歓喜の声を上げながら彼らの後ろに続いて歩きます。自ずと、

通りを上がるにつれて列は膨らみ、歌声もどんどん大きくなっていきます。ロイヤル・オーク、ブラック・ホース、そしてプラウト、パプの前に差しかかる都度「止まれ」の号令が掛かり、いつもの雄叫びと喜びの声が上がれば、魔法のように店主が姿を現し、一軒目^[訳者補記のホワイト・ホース]で受けたと同じ歓待をもって彼らをもてなしてくれるのでした。この村の巡行は、^[訳者補記]教会の前、村の中心にある池のところをぐるりと回ってハイ・ストリートへ戻り、農場主の暮らすチャルナーズ (Challeners)^[訳注]本来はチャロナーズ (Challoner's)^[訳注]の庭で終わりを迎えます。農場主の旦那様が、奥様とお嬢様たちを伴って姿を現し挨拶をされると、男たちは「いつもの雄叫び (good old holler)」でこれに応えます。それから男たちは、チャルナーズ農場の荷馬車小屋へ移動します。そこにはすでに、彼らのために運び込まれた18ガロン入りのビア樽が台の上に鎮座し、少年たちには、箱に入った大量のレモネードやジンジャー・ビアが用意されていました。父は、ビア樽に栓を取り付けて開栓すると、最初一杯の味見をします。まあ、美味しくないわけなどないのですが、一応、口に合うものであることが確認できると、ジョッキ (pot) を高々と掲げて大きな声で、「酒にも色々あるもんだが、こいつあとびきりの上物だ (Cocks and hens upon the midden and, by crites^[訳注] = Christ], she's a good 'un^[訳注] = nun.)」と叫びました。するとすぐさま飲み物が皆に行き渡り、収穫を祝う宴の始まりです。そして、丸々とした18ガロン樽、キルダキン (kilderkin)^[訳注] = half a barrel. オランダ語で small cask の意。ビールの場合標準は 1 barrel = 36 gallon] から黄褐色に輝くビールの最後の一滴がジョッキへ注がれ、この最後の一杯が飲み干されるまで、活気に満ちた祝宴は延々と続きました。

「そして、残らず麦を刈り取って
 麦穂をぜんぶ掻き集めりやもう
 あとはちよっくらビールをあおり、最高の気分で

来年も豊作でありますように祈るのさ。*³

訳注*³ Copper family が代々歌い継ぐ「若き相棒 (Two Young Brethren)」の一節。汗水垂らして懸命に働く「羊飼 (tender of sheep)」と「農夫 (planter of corn)」という組み合わせは『創世記』第3章19節の ‘In the sweat of thy face shalt thou eat bread’ や同第4章2節の ‘And Abel was a keeper of sheep but Cain was a tiller of the ground’ などを下敷きにしたものと思われる (The Copper Family, *Song Book: A Living Tradition*, Coppersongs, 1995, p.105参照)。

父はこう続けます。

小麦をぜんぶ刈り終わると次の土曜日には休みがもらえて、地主の旦那が使いたい者は自由に使えて、ひとりにつき2、3頭の馬と荷車を貸してくれた。みんなそれで冬用の石炭を仕入れに行ったもんよ。給金は毎週金曜の夜にもらってた。だから、収穫手当を受け取ったらすぐ、翌朝の2時半か3時には、石炭を買いにケンプトウン駅 (Kempton Station) [訳注現在の Brighton Station から南東へ約1マイルほどの位置に1971年まであった駅。Rottingdean からは西へ3マイル。] へ向かった。石炭は1トン [訳注 = 1 long ton = 2,240pounds = 1,016.047kg] 当たり17シリングで好きなだけ買え、雨がばらついたときのために空の袋を2、3枚持って行つときゃ、4ペンス、だからビール1クォート [訳注 = 2 pints] 分で、いつだって袋ぜんぶにコークスを一杯に詰めしてくれた。で、オレたちちゃだいたい午前の6時半までに家へ戻って荷を降ろし、石炭をしまつて馬たちを厩舎に戻すつて段取つたもんさ。そうすると、いつもの「ラシャ・ワゴン (rasher waggon) [訳注 = rasher wagon = frying pan]」を覆い尽くすほどたくさんの熱々のピフテキとフライド・オニオンにありつけるつて寸法よ。

メシが終わると、午前10時を目処に、ちょっと小ざれいに身支度を調べてブライトンまで買い物に出かけた。10時か10時半か、どっちかまでに支度が出来てねえと歩いて行く羽目になつちまうからさ。午前のバス

はこの2本だけで、その次は午後の2時だった。いつも毎度行きつけの何店かに足を運んじゃ冬物の服を買ったもんよ。長袖シャツなら安いもんだと1シリング11ペンス、高くても2シリング6ペンス、袖なしの肌着(vest)が1シリング6ペンス、^[訳者補記 下着の]パンツが1シリングちょうど、コーデュロイのズボンが3シリング11ペンス、コーデュロイの袖付きチョッキ(sleeve waistcoat) ^[訳注 軽めの上着]が5シリング11ペンス、コーデュロイのジャケットが7シリングから10シリング、^[訳者補記 長持ちするよう靴底に] 鋏を打ったブーツが4シリング11ペンス、ズボンつりが6ペンス、襟が6ペンス、ネクタイが4シリング半から6シリング、それからオーバーコートが12シリング6ペンスで買えた。てなことで、収穫期に稼いだ金のうち1ポンド14シリングは石炭、それに2ポンド5シリングくらいが服にとって感じだったから、稼ぎがせいぜい4ポンド10シリングもあれば、まだ余裕で^[訳者補記 Brightonの繁華街]チャーチ・ストリートのレストラン、バーバーズ(Barber's)へ出かけてご馳走をたらふく平らげた後でも、お袋に新しい帽子を買って帰れた。

それぐらいの時間になると流石にくたびれてきちまうもんだが、どこぞへ出かけて腰を下ろして休もうなんて頭はなかった。荷物を置いてちょっとばかり休むんなら栈橋か水族館 ^[訳注 1872年開館。数度の改築・再編を経て現在は Sea Life Brighton として営業中。] だったが、バスが出る午後5時半までには戻ってこなけりゃならなかった。何せロッティンディーンの農場で働くヤツらは、みんなこの日は Brighton に来てたからな。このバスを逃すと次は6時しかなかったんだが、これが2頭立ての馬の曳く ^[訳者補記 小せえ] バスで、オレたち「ウサギ小屋」って呼んでた。家に戻るとまたフライパンに火を入れて、一日の締めくくりに、餌をたんまり貰って丸々肥えた豚のあばら肉を焼いて食べた。もうへとへとだった、この一日で冬支度はバッチリだった。

大人の野郎どもはこんな感じで、もうそれ以上出かけるなんてことはなかったが、^{おけ}若え連中は連れだって、蒸気で動く遊覧船、プリンセス・メイ号に乗って、 Brighton から ^[訳者補記 東へ15マイルほどの] イーストボーン(Eastbourne)や ^[訳者補記 西へ8マイルほどの] ワージング(Worthing)、ときには英仏海峡の真ん中あたりまで繰り出すなんてこともあったぜ。デヴィルズ・ダイク(Devil's Dyke)の遊園地(pleasure grounds) ^{[訳注 Brighton から北西へ5マイルほどの谷。18世紀半ばから}

景勝地として関心を集め、1892年に Adventure Park が開園。1894年にはイギリス初のロープウェイも設置され好評を博した。]に出かける連中もいたな。

【10月】

「狩人たちよ、朝だ、張り切って行こう

ヒバリたちが天高く囀りを響かせる、狩りには絶好の好天だ。

愛しい彼女に知らせておかなかちゃ、猟犬たちももう外で待ってるって

愛しい彼女に知らせなきゃ、猟犬たちが待ってるって

愛馬に鞍を据えて準備万端

さあ、茂みを探って野ウサギを見つけるんだ。

「士気上がる狩人たち (Sportsmen Arouse)」

10月は正真正銘、秋の特徴を備えた月です。真夏の深い緑は、年の瀬の落ち葉舞う季節を迎えて赤茶や黄金に色を変え、旅立ちのときを迎えたツバメたちが、数百羽はいようかと思いきほどに群れを為し、頭上の電話線の至る所に留まっては読み取りようのない音符を描いて、冬がそこまで来ていることをいち早く私たちに知らせてくれます。腰を屈めて畑を耕す農夫の背中をお日様が温めてくれることがあったとしても、それは、春になったらまた戻ってくるよと、無用の心配をかけぬよう優しく背中を叩いて別れを告げているに過ぎません。

しかし、田舎家に暮らす農夫の一家は周到に備えをしていましたので、未だ姿の見えぬ迫り来る冬の脅威に殊更恐れおののくことなどありませんでした。小屋には石炭も薪もたくさん蓄えてありましたから、暖炉の燃料には事欠きません。ニンジン^{たるき}は霜で悪くならないよう庭に藁で覆ってありましたし、タマネギは、納屋の垂木から長い紐を張っていくつも吊してありました。「青物」ならキャベツ畑からいくらでも取ることが出来ました。それに皆、暖かい服を着ていましたし、靴もきちんと乾かしてから履くことが出来ていまし

た。そして何より、これからどんどん日が短くなり、暗くなって行きますが、それでも農場には仕事が充分にあつて、僅かではありましたが、決まった日に給金を手にすることが出来ましたからね。

父はこう綴っています。

さて、収穫が終わるといよいよ秋だなんて感じがした。畑は切り株だらけでなんにも残っちゃいなかったが、まだまだやらなきゃならねえ仕事は山ほどあった。小麦畑はぜんぶもう藁を掻き集めてあったから、今度は荷車を馬に曳かせて畑へ入り、掻き集めて別にして山積みされてる使い物にならねえ麦束 (rakings) を運び出すわけだ。細かく挽いてブタに食わせるのさ。屋根を葺くのに使う藁 (thatchers) もひとつひとつ山を回って集めていかなきゃならねえ。おまけに屋根材に使うんだから水気を切らなきゃなんねえんだ。こいつらを全部なかへ取り込んで、覆いを掛けたら、お次はマングル (mangle) 〔訳註 飼料用ビート〕 の番だ。上に伸びた葉を切り落とし、畑から引っこ抜いて台車に乗せて運び、納屋へ放り込む。まあ、しまい込むってことよ。丸一日がかりの仕事さ。朝の6時半に男6人で指示をもらいに行つて、畑へ行つて引っこ抜き、葉を落としたあたりで11時。昼メシだ。メシが終わったら、馬の曳く荷車が3、4台か、多いときは6台、いや一番多かったときは8台来たかな。デカイ農道から畑までの距離次第よ。オレたちやいつも舗装された道 (hard road) の近くに荷車を寄せてマングルを放つた。そうすりゃ馬一頭で牛小屋まで運んでいけるからな。4人は畑に残つて穴ぼこの土を均し、2人が抜いたマングルを放下車に乗せて道端まで運び、馬車の荷台へ放り込む。で、小僧たちが馬の手綱を引いて繰り返し畑と牛小屋を行き来するわけだ。抜いたマングルは、その日のうちに必ず運び出さなきゃならなかった。霜にやられちゃうからよ。

この辺りの地域では、10月と言えば獵期の始まりでもありました。当時、ロッキンディーンの農場主はステニング・ビアドさん (Mr Steyning Beard) で、この方が、ブルクサイド・ハリアーズ (Brookside Harriers)

という猟犬の一団を飼育しておられ、沢山の会員を集めて、多いときは60頭もの馬が野を駆ける、この著名な狩猟団の長を務めていらっしゃいました。この村で狩りと言えば、肉屋のウィリアム・ヒルダーさん (Mr William Hilder) と、こちらも狩り好きの教区牧師様がおられ、お二人とも頻繁に馬に跨がり、猟犬を従えて狩りに出向かれました。聞くところによると、村の教会に長くお勤めだったトマス牧師は、説教壇でお話をされる際、^[訳者補記]国教会聖職者の正装である黒い裾長の] カソックと^[訳者補記]袖広の白衣] サプリスの下に、どちらも乗馬用の七分丈ズボンとブーツを履いておられることがよくあったそうです。ウサギを追う狩りからの帰りが遅くて礼拝が始まるまでにきちんと着替える時間が無かったか、あるいは、礼拝が終わったらすぐさま狩り場へ駆けて行きたかったのか、いずれかでしょうね。父はこんな風に話していました。「あの頃はこの辺りにゃいい野ウサギが結構いたもんさ。ウサギを追っかけて2時間そら、馬に乗って野を駆けんよ。なんにも行く手を阻むもんなんてねえ。よく晴れた霜の降りる寒い朝なんざ、サイコーだったぜ」。

「緑一面の野を丘を、息を切らしてウサギが駆ける
 猟犬係は犬たちに、仕留めよと声を張り上げ命じる。
 走れ、走れ、逃げ惑う野ウサギよ、
 走れ、走れ、逃げ惑う野ウサギよ。
 続け、続け、ホルンの奏でる合図に、
 応えて続け、それ、無邪気に走る野ウサギを追い詰める。」*4

訳注*4 Copper family の歌い継ぐ「土気上がる狩人たち」の一節。最終行に ‘hark forward’ のような猟犬への指示の声が入っていることなどから、馬に跨がって野ウサギを追う狩りの場が活写されていることがわかる。3・4行目の「走れ」と訳出した箇所は原語は ‘relope’ であるが、Bob Copper の祖父 James が1920年代前半にうろ覚えで書き記した際には ‘alope’ となっており、何れも正

確な意味はわかっていない。狩猟の用語としても一般的なものではないようで、目下の Copper family の解釈では ‘elope’ に近い意味合いであろうとのこと。

しかしながら、「高名な紳士たち (gentlemen of high renown) [訳註この名で知られるキツネ狩りの歌もまた Copper family のレパトリーのひとつ]」が、乗馬服を非の打ち所無く完璧に着こなして出陣の杯を交わし、猟犬たちを率いて狩りに臨み、馬の背に跨がって野ウサギを追う勇猛果敢なスポーツの喜びを享受しておられるのとは対照的に、そうした派手さからはほど遠い相当に質素な次元で、どちらかという人目を忍ぶような格好で自然と向き合うもうひとつのスポーツが時折行われていました。[訳者補記私の父] ジムは、いつも、鶏舎の脇の暗くて小さな小屋に、賢い犬を一頭と赤目のフェレットを数匹飼っていました。父は村を取り囲むこの界隈の丘陵地がこのほか好きでしたので、ここを^{ねぐら}とす野生の生き物の生態や習性については幅広く詳しい知識を持ち合わせていました。村の徒歩圏内にあるものなら、アナグマの住処もヤマウズラの巢もすべて把握していましたし、アザミの群生している場所が、その実を狙って舞い降りるゴシキヒワの格好の餌場になっていることや、ムネアカヒワが飛来して水を飲んだり水をはねて遊んだりしている露池がいくつかあることも知っていました。キツネの罠もウサギの駆ける通り道も、父の頭のなかには知識として蓄えられていました。父は生涯地元を愛しましたが、動物界の捉え方や生き物への姿勢は優しくも現実的なものと一貫していて、何かしら安っぽい感傷によって曇らされることはありませんでした。ですから、わが家の調理用コンロの上に置かれた空の鍋が、父の上着の並外れて大きな内ポケットから取り出されたもので満たされることもよくありました。その様は、落ち着き払った堂々たる手際で、シルクハットのなかからウサギを出してみせる手品師のようでした。ただし、父が取り出すウサギは、すでに腸が^{はらわた}取り除かれて動かなくなったものでしたけれどね。

父はウサギ捕りが大好きでしたし、鳥の捕獲も名人級でしたから、1時間か2時間そこらあれば、「ウサギや鳥 (flick or feather)」^[訳註 flick = fleck = flox (Sussex dialect) ウサギの毛皮の意。これに準えて feather で鳥を表した言い回し。]の狩りに興じたり、ときにはただこのような野生の生き物を眺めて丘の上で過ごすのが何より好きでした。

野山でどのように狩りを楽しんだか、ここに3つのお話を、父の記したとおりに掲載しておきます。

運とフェレット猟の楽しみ

誰にでも運ってもんがあつて、コイツだけはこっちじゃどうしようもねえもんだ。ある朝オレは、今日は一日ルーズ (Loos) ^[訳註 東の隣村 Saltdean の北、Rottingdean 中心部から半マイルほど東の丘の上の一画]の茂みにウサギ捕りに出かけようと思ひ立って、コート農場へ下りてつて、オレの飼つてたフェレット連中と、網を一揃いと、踏躑ふみくわを一丁、棒を一本取つて、フェレット猟の支度を調えた。いつも通りプラウに寄つて、陶製のデカイ瓶に半ガロン、ビールを仕入れて持つてつた (パブは午前6時から午後11時まで一日中開いてた。)が、金を払つたことは無かつた。その日最初に捕つたウサギを持つて来りゃビール代8ペンスをチャラにしてくれるつてことで、前から店主と話が出来てたからさ。てことで、オレはビール瓶を網籠に入れて口を閉じ、フェレットの入つた籠と一緒に片方の肩にかけて網ともども背中の方へぶら下げた。ホワイトウェイの道沿いに丘を登つてつて、牧師さん家の上庭ちを抜けて広い野原に出る辺りで、紐が切れたか解けたかして網とビールの入つた籠が落ちこちたのよ。昔から使つてた瓶が割れるのが聞こえたが、フェレットは捕まえとかなきゃならねえ。覗いてみると、オレの大事なビールが道にポタポタ落ちてやがるのが見えた。残りは網に染み込んだんだろう。バラバラに割れた瓶の欠片を籠から取り出して、野原に思いっきり投げた。まだたいして歩いちやなかつたし、プラウからも400ヤードくらいしか来てなかつたが、オレは引き返さなかつた。ひとり呟いたよ。ダメだ。オメエ、今日はビール抜きだつてよ。で、網の口を括り直すとまた歩き

始めた。

ルーズは、フェレット猟をやるにゃあ、なかなか骨の折れるところだった。10だか12くれえの小せえ巢穴と、上の方のスロンクス (Slonks) の角のところにデケえのがひとつあったからな。オレは、着くとすぐさま、まずは小せえ方をぜんぶ片づけていこうと思って準備を始めた。今日はデケえ巢穴に手を付けなくても、要るだけ充分ウサギが手に入るかも、なんて考えながらよ。で、ひとつ目の穴に網を下ろし始めた。引き上げてみたが、かかっちゃいねえんで次の穴へ。網を降ろして引き上げる。順に小せえ穴ぜんぶ試してみたが、ウサギなんざ、影形どころか気配すらねえ。

網がビール臭え^{くせ}せいでウサギがおったまげて逃げ出したわけじゃねえ。そんなこたあわかってたさ。逃げ出すウサギの姿なんぞなかった。いりゃあフェレットの連中が追いかけてたはずさ。さて、てなこと、オレはデケえ穴へ向かうことになった。網を70枚くれえ落とさなきゃならねえほどのデカさだった。オレは、こりゃ昼から忙しくなるかもな、なんて期待しながら手はずを整えると、フェレットを2匹、穴のなかにもぐらせてみた。かかってくれと祈りながら、耳を澄ましてじっくり様子をうかがうこと半時間。まるで動きがねえ。で、オレは、もうメシにすることにした。うまそうな豚の骨付き肉のローストと、パンをひとかけ持って来てたのさ。さていただくかと構えて、ガブッと一口かじりついたときだった。左を何かがサッと通り過ぎた。オレは肉とパンとナイフを置いて振り返り、その姿を目で追うと、かろうじて白い小せえ尻尾が茂みのなかを駆け抜けて逃げていくのが見えた。[訳者補記 フェレットを入れた] 網はニワトコの木 (elder tree) [訳註 = elderberry = sambucus] の根っこに引っかけておいたんだが、口がきちんと締まってなかったみてえで逃げ出したらしい。根っこのところからもう一回、網を持ち上げて口を締め直すと、オレはメシに戻った。と、そのときだ。フェレットのうち一匹が、オレの豚肉を穴のなかに引きずり込むのが見えたのさ。これがトドメだったな。こりゃ今日は帰るしかねえって思ったぜ。オレはナイフを拾い上げ、パンを鞆にしまい込んだ。アイツらに、それが家に戻ってから食うはずだった今日の晩メシ代わりだからなって言ってよ。なんてったって、いつもビスケットを食わされてるフェレットの連中に、脂肪たっぷりの豚肉はこってりし過ぎだろう。とにかく、それからそこで4時ま

で、オレはヤツらを穴から引きずり出すありとあらゆる手を尽くしたが、ダメだった。で、もし他のフェレットが豚肉を嗅ぎつけたら、ひょっとして一週間や十日そこら、穴のなかにいるんじゃねえかって考えたオレは、空の籠をひとつ、いくつもある穴のうちのひとつに入れとくことにした。たまたまその穴に入り込むことでもあれば、そのなかで丸くなってるなんてこともあろうかと思って、次の日から3日続けて覗いてみたが、ツキは無かったな。金曜日になると、〔訳者補記 弟の〕チャーリーがブライトンから戻って来た。実家へ戻ると、ときには屋下がりと一緒に狩りへ出たりすることもあったし、その日も、もしフェレット猟に出かけるんなら、ルーズへ行ってフェレットを一匹捕まえてきてくれないかって頼んでみたんだ。そしたら、そんならひとつ走り捕まえに行つて来てやっかなって言って、弟は出かけてった。アイツはもう、これぞまさにコパー一家の男っていう典型で、この辺りの丘を歩くのが大好きだった。場所はもちろん説明してあったんだが、運も味方して、弟のヤツ、オレが網を入れておいた穴を難なく探し当て、しかもフェレットが一匹そのなかに入ってたって言って持って帰ってきたのさ。びっくりだろ。アイツの骨折りは報われたってわけさ。その2日後の夜、ジャック・リード (Jack Reed) のおやっさんが 〔訳者補記 2マイルほど北東の〕 テルスコム (Telscombe) 村からの帰り道にもう一匹のフェレットを捕まえたらしいが、モグラみてえに丸々肥えてやがったってよ。オレはかわいいフェレットを何匹か飼ってたのよ。白くて小せえ2匹はメス (bitches) で、到底ウサギを捕まえてこれる体格じゃなかったから、猟に使う (laid up) 〔訳注 lay up (Sussex dialect) 「隠れて待機する」の意〕 ってこともほとんど無かったんだが、まあ豚のローストはヤツらにとっちゃクリスマスのご馳走みてえなものだったろうよ。それから、白いドッグ・フェレット (dog ferret) 〔訳注 オス〕 も一匹飼ってた。コイツは、〔訳者補記 他が出払ってて〕 この小せえメスのフェレットを使わなきゃならねえときなんか、ライナー (liner) 〔訳注 地中の巣穴に潜つての猟の際、組になっている別のフェレットを探したり支援したりする役割〕 で使ってた。フェレットの連中がウサギを巣穴の奥に追い詰めるだろう。ウサギはもう身動きできねえわけだ。そこでこのベテランのオス (old dog) を別の穴から入れるのよ。オスは連中を見つけるとウサギを仕留める。で、オレが穴に手を突っ込むと、ちょっとずつコイツがウサギを引きずり出して

くるって寸法よ。こうすりゃあちこち掘り返さずに済むのさ。昔からオレは、ウサギを巣穴から引っ張り出す獵の出来は、月の満ち欠けと関係してるって思ってる。月が満ちていくときは割と簡単に捕まえられるんだが、欠けてってるときはそうはいかねえ。いつだってそうだった。一時^{いつとき}なんかフェレットを飼育して、増やした40匹を3シリング6ペンスで一気に入らフランスへ売りさばいたなんて年もあったな。

さて、兎にも角にもフェレット獵ってのは運次第ってことよ。ビールはこぼれる、昼メシの豚肉は持ってかれる、ウサギは捕れねえし、フェレットにも逃げられ、パブの店主にウサギ1羽も持って帰れねえ。まあ、何よりオレはビールにありつけなかったのよ。

ここまでは運について、こっからは狩りの話

クリスマスの二日前のこと、コート農場の納屋で、オレは蒸気機関で動く脱穀機に麦束を噛ませていく作業をした。^[訳者補記]機械へ放り込む前に] 麦を束ねてある紐 (bon) ^[訳註 = bond (Sussex dialect)] を切る作業は、ビリー・スナドン (Billy Snudden) がやってた。休憩取って軽く腹ごしらえした (lunch) 後だから、午前の10時半くらいから取りかかったんだっただけかな。そしたらほどなく、親父がハシゴを登って来て言うんだ。旦那が今し方ブライトンへ発ったんだが、オメエ、ウサギを2羽 (a brace) すぐに捕れるとこ、どっか知らねえかってよ。さてなあ、リンクス (Links) ^[訳註 Loos の近辺] の堤のとなら2、3羽捕れるかも知れねえけどって返事すると、親父は、よっしゃ、じゃあ小僧をひとりこっちによこして麦束を解かせるから、脱穀はスナディ (Snuddy) ^[訳註 = Snudden] に任せて、オメエ、今すぐ出てウサギ捕りに行ってみってくれ。捕れても捕れなくても、とにかく昼メシ (dinner) までには戻ってこいってよ。わかったって答えると、オレは荷車小屋まで自分の飼ってるフェレットのヤツらと道具を取りに行き、支度を調べてすぐさま出かけた。

さて、リンクスの堤はニューランズ (Newlands) の納屋 ^[訳註 かつて Rottingdean の東斜面の一面にあった] のすぐ上手にあって、ルーズの端まで来てみると小ぶりの巣がひとつあった。だいたいデカイ巣には80から100ぐらいの穴があって、小せえ巣で10から20かな、穴があるもんだっただから、道すがら、今まで何度もやってみようって思ってた、小

せえ巣穴には網を入れ、デケえ方にはフェレットを潜らせるってのを試してやろうと考えてたわけよ。だから、オレは着いたらまず、デカイ巣穴の遠い方の端に網をかけた。そして、[訳者補記]地面に突き立てた]棒と踏躡にそれぞれ上着と空の網籠をかけてヤツらを脅かし、小せえ穴に隠れ込ませる。それからフェレットを2匹穴に潜らせて、オレは網をかけた反対側へ向い、ちょっとばかし草むらに身を潜めようとしたら、そんなときウサギが一匹、巣穴の奥からこっちへ向かってきて網にかかったのよ。そうさ、オレはヤツらが巣穴からちょうど出ようとするところに罠を仕掛けたわけよ。網にかかったそのウサギを取り出そうとしたら、もう2匹こっちへ来るのが見えた。こりゃ大獵になりそうだって思ったぜ。なにせヤツら、網を元通りにかけ直すのが早いから次から次へと駆け込んで来やがる。オレのことなんざ、まるっきり気にかけてない風だよ。何匹目かのウサギを取り出そうとしてると、馬の駆ける音がして誰かが近づいて来た。顔を上げて見ると親父 (Old Man) だった。馬に乗ったまま近づいてくると、おい、オメエ、もう結構捕ったろ、今また捕まえたなって言うんで、立ち上がって、ああ、これで16羽さって答えたんだ。親父はもう充分だって思ったみたいだよ、反対から入れたオメエのフェレットはどこにいる、すぐに引っ張り出して家に帰れって言うのさ。ビル・エイヴィス (Bill Avis) の野郎がターピン (Turpin) を連れてきててよ、急に腹が痛くなったらしくて大分具合が悪そうだって言うんだ。こっちへ向かう前に飲み薬 (drink) を渡してやったんだが、オメエもうち家に戻ったらすぐ、もう一回、薬を出してやってくれ。物置のオレの戸棚に入っている2番って書いてあるヤツをひとつだ。で、オレが戻るまでくたばらねえようにしとけてよ。オレはウサギを1羽取り出すと、こいつを使ってフェレットを穴から取り出そうとした。ウサギを巣穴の前に置くとすぐ1匹目のフェレットが現れ、2匹目も続いてやって来た。で、そのウサギを目の前に落としてやると、フェレットの連中、2匹とも食らいつきやがった。そこで、オレは2匹を持ち上げて籠に入れ、家路についたのよ。まあ、だが正直言やあ、まだその場を離れたくなかったさ。もっと時間がありゃ40羽、いや50羽は行けてただろうよ。家に戻ったのが12時半。リンクスまで歩いてって手はずを整え、16羽のウサギを捕獲して、ぜんぶで2時間かからずに帰宅したってわけだ。

さて、1時ちょっと前ぐらいだったかな、親父が戻る頃にはターピン

の具合も良くなっていたんで、オレは昼メシを食って、また脱穀機のところへ向かった。その日の晩メシ (tea) の後、親父のところへ行くと、オメエ、あのウサギ、どうするつもりだって聞くから、考えてねえ、親父は何羽いるって聞き返したら、2羽もらえれば、クリスマス晩にウチで食うパイにゃ充分だって言うんで、誰かいらねえかな、みんなクリスマスの時期にはご馳走をたくさんそろえるからなあ、旦那も2羽いらねえかなって言うと、バカ言うんじゃねえ、絶対ダメだって親父に言われたよ。絶対に旦那のところへ持ってっちゃならねえ。オメエに仕事を抜かさしてウサギを捕りに行かせたなんて知れたらヤベえだろうが。アホかってよ。だよなって、オレも言った方がいいが、引き取り手を探さなきゃなんねえ。で、オレは残りのウサギをデカイ袋に入れてブラウまで運んでって、パー (tap room) の床に置いて、今なら1羽8ペンスだ、どうだかって言ったのさ。店主がまず2羽引き取ってくれて、それからさらに2、3羽さばけたが、そのあとが続かねえ。で、やむなく銀貨1枚ぼっきり (tanner) ^[訳注 = 6 pence] でどうだかって値を下げてみたら、それからまた2、3羽売れた。

さて、夜も更けて10時ぐらいになって、あと1時間じゃもう客もたいして来ねえなって思ったもんで、1羽4ペンスにまた売値を下げた。そうこうして、閉店の11時には残り3羽ってとこまで来た。だから、最後までいた連中に言ったのさ。誰かこの残ったウサギ、好きなのを選んで持って帰ってくれ、置いてくからよ。言ってみりゃ、タダになるまでねばった連中に、早い者勝ちでご褒美をやったってわけよ。もう5、6羽やっても良かったかな。

このちょっとした二つの話から、フェレット猟ってのはその日その日のもんで、とにかく出かけてみねえとどんな結果になるか皆目見当もつかねえってことがわかってもらえるだろう。首尾よくいって大猟かも知れねえしスカで終わるかも知れねえ。あの日2時間の狩りで、まあたいした儲けにゃならなかったが、うめえビールにはたらふくありつけたぜ。

最後は幸運に恵まれた狩りの日の話

オレはある日、ロング・ダウン (Long Down) の灌木の茂みへフェレット猟に出かけた。^[訳者補記] Rottingdean から4マイルほど北東にある] ノー

スイーズ (Northeast) 農場の分岐のあたりで、だいたいロングダウン (Longdown) の頂点から下手のスロンクスの納屋まで行くっていう、オレたちにとっちゃ一大行事だった。こんな風に気合いの入った日はいつも、昔なじみのテッド・バーソロミュー (Ted Bartholomew)、通称バツツ (Batts) に付き合ってもらってた。バツツは、ブライトン下水道局に勤めてたんだが、ウサギ捕りとなると、いつも休みを取って都合をつけてくれてるようだった。さて、オレたちは道具を抱えて、例の灌木の茂みの一番高いところまで登り、そこから作業に取りかかった。茂みを下りながら半分ほど来てみたが、ウサギどころかネズミの気配すら感じられねえ。不思議に思っていると、理由がわかってびっくりさ。間の悪いことに、突然取っ組み合いのケンカが始まったのよ。ちょうどひとつの巣穴のなかで、2匹のフェレットがオコジョ相手に大ゲンカさ。すぐさまオレたちはオコジョを仕留めて穴から網を取り出し、さらに下手の方へ降りてってまた他の穴を試してみた。そして、ほぼほぼ一番下の辺りにさしかかった頃、迷子のフェレットを1匹捕まえた。密猟のヤツらが置いてったんだらうな。大方、慌てて立ち去らなきゃならなかったってとこだらうよ。とにかく、オレはこの迷いフェレットを籠に入れて連れて帰った。後からわかったことだが、コイツがなかなかデキるヤツだよ。後々随分と稼がせてもらったぜ。さて、なんでここいらにウサギがいねえのかも理由はわかってたが、残りの穴も一応調べてみた。だがまあ、やっぱり空だった。もう時間も5時ぐらいで暗くなり始めたんで、オレたちは道具を片づけて家路についた。収獲なしじゃ、まるで気分は浮かなかったがな。今は浄水場のあるルーズの茂みの辺りに差し掛かると、ちょうどテナント・ヒルの池 (Tenant Hill Pond) の上に月が昇ろうとしてた。そして、納屋の近くの窪地のあたりまで来たところでふいに、ウサギが2、3羽、向こうへ駆け込むのが見えたのさ。どうするってテッドのヤツが言うから、オレも、手ぶらで帰りたいくねえし、やるかって言ったのさ。その窪地には穴が20個ぐらいあったから、ひとつひとつ網を放り込んでいき、それからフェレットを2匹穴に潜らせた。すると、入るが早いから、次から次へと穴から出てきやがる。飛び出してきたところを素早く捕まえてまた穴に潜らせる。フェレットを捕らえて穴に戻した回数だけ収量が上がるってことよ。オレとアイツで一匹ずつ面倒を見て、網をひとつずつ引き上げ数えてみると、40分で都合22羽の

ウサギがかかった。おかげで残りの帰り道、オレたちの浮かれてたことよ。道具を片づけながら、オレは半ダースいただくことにしたんだが、テッドのヤツ、1羽もいらねえって言うのさ。ただ、一人二人、ブライトンにいる連れに2羽ずつ持ってくかなって言うんで、8時に待ち合わせせたのよ。落ち合うと、オレたちはステニング・ピアドの旦那のとこの厩へ向かった。ジョウ・ブルカー (Joe Brooker) のオヤジさんとこのポニーが繋がれてたが、ジョウの姿はなかった。顔なじみのこのポニーにオレたちは二輪の馬車を引かせてコート農場へ行き、ウサギを乗せて出かけた。向かった先は、^[訳者補記]ブライトン中心部の]ジョージ・ストリートのこちんまりしたパブさ。テッドがそこいらにポニーを繋いで来たんで、オレたちは店のなかへ入って、^[訳者補記]ウサギの対価ってことで]ただ酒を食らった。この店、どうやら閉店時間ってものはないみてえだった。12時をちょいと回ったところでオレたちは店を出た。テッドは馬を操れる状態じゃなかったんでオレがやったんだが、ポニーのヤツ、かしこいもんで、ダウン・ハウスの厩のとこまでちゃ〜んとオレたちを連れてってくれたよ。てなわけで、ツキのない始まりだったが、最後はきつちりフェレット猟で締めくくったっていう一日だった。

長年農場で過ごしてきた私の父は、常に犬を飼っていました。そして、どの犬も父の時代には農作業に欠かせない、かけがえのない仲間でした。なかでも「ラフルズ (Raffles)」は、どうやら父の一番のお気に入りだったようです。何しろ父の手記に出てくるのは、この犬だけですからね。

昔、小柄のかわいいフォックス・テリアを一匹飼ってたことがあった。ほんと、サイコーにかしこい犬だったよ。フェレットの連中とも仲良くやってくれた。猟へ行くと、おんなじ籠にみんな入れといても揉めることはなかったし、何しろアイツにゃ困ったときに色々と助けてもらった。例えば、フェレットが巣穴のなかでウサギを殺しちまったり、奥の抜け道のない行き止まりにウサギを追い込んじゃまったりすると、決まってアイツに聞いたもんさ。「ヤツらぁいったいどこ行った？」ってよ。すると、アイツはすぐ、ヤツらのいる真上の地面を指して、どこを掘っ

たらしいか教えてくれるのよ。当たってなかったことなんざ一度もねえ。おかげでほんとに助かったぜ。余計な時間をかけずに済んでよ。

ラフルズって名前の犬だったが、たまにゃあ腹の立つこともあったぜ。干し草作りの季節のある日、畑で作業をしてると、午後になってめっちゃくちゃ暑くなってきたもんで、上着を脱いで置いていたのよ。しばらくして、用があって1マイルほど先に作った干し草の山のところへ行っただが、もう7時頃になっちまってよ。あがる時間だろ。オレは上着のことを思い出したんで、見習いの小僧に畑の向こうまで取りに行ってくれって頼んだのさ。そしたら小僧、泣きながら帰ってきて言うんだよ。ラフルズが上着を取らせてくれないって。馬車で戻ってきてたのに、結局オレは自分で上着を取りに行く羽目になったのよ。歩いて畑へ戻って、また歩いて丘を越えて帰ってきたのさ。その晩、ラフルズの晩メシの骨には肉があんまりついてなかったぜ。

父とラフルズの関係がこれ以上に緊迫したことが一度だけあります。ある日の真夜中、おそらく庭でキツネがうろつく気配を感じたのでしょう、ラフルズがひっきりなしに吠え続け、家族全員を起こしてしまったことがありました。父は心地好い羽毛布団くるに包まれたまま何度か怒鳴って黙らせようとしたんですが、一向に収まりません。ブツブツ言いながら、とうとう父はベッドから飛び出し、蠟燭ともを点し、眠そうな顔で細い階段をヨロヨロ降りていきました。「小屋に戻れ！」と、父はこの上なく厳しい高圧的な口調で命じました。反応はありません。あれほどしつけの行き届いた犬ですから、主あるじの指示に応じないなど考えられないことでしたし、また同時に許しがたい振る舞いでした。「戻れ！」と父は怒鳴り、いつもの寝床のある洗い場の方を指さしました。かわいそうにラフルズは混乱していました。いつも聞き慣れた飼い主の声なのに、袖の短いシャツを身に纏った下には華奢な白い足が2本ニョキッと伸びていて、これがしかも蠟燭の火に照らされているわけですから、この奇妙な姿は、ラフルズにとってまるで見覚えのない人物で、自分の知る、耳に馴染んだこの声の主、ご主人様とは似ても似つかぬ姿だったのですからね。ラ

フルズは、この怪しい男に向かって唸り声を上げていました。父は「小屋へ戻れ！」と大きな声で言いましたが、だいぶ自信なさげな口調になっていました。これに対してラフルズは、唇を巻き込み、歯を見せて、怒りを露わにしながらかつ父の方へ向かっていきます。ラフルズは本気で、「この犬畜生が」と吐き捨てると、父は慌てて台所のテーブルの上に飛び乗り、「オレだ。小屋に戻れ」と言いましたが、床に就いて高いびきで眠りこけておられるはずのご主人様に忠義を果たさなければと信じて止まぬラフルズは、このヘンテコな形の侵入者に、吠え懸かり、飛びつこうと懸命でした。かくして父は、ラフルズに噛みつかれまいと、テーブルの上で片足ずつ交互に上げて、跳び跳ね続けることとなりました。「おっかあ。ズボンを放ってくれ」と父が助けを求めた後、ようやくことは収まりました。ズボンを履いた途端、父の飼い主としての地位と威厳は回復し、平穏なときが戻りました。ラフルズは、バツが悪そうにこっそり小屋へ戻ってしまいました。

「アイツはいい犬だった。サイコーによ。」と、父はよく言っていました。それから数年後、ラフルズは忽然と姿を消してしまったのです。

農場で脱穀の作業をやるときにゃ、ラフルズも連れてってたもんよ。アイツは脱穀の時期が好きでよ。藁山を片づけていくと、だいたイクマネズミがゴロゴロ見つかるだろ。山ひとつに20から100くれえかな。その日の仕事が片づいて家へ帰ろうかって段になると、アイツは必ず辺りを見渡して、目に留まったなかで一番デカイクマネズミを捕まえて、口に咥えて帰ったもんよ。で、家の裏口の前のマットの上に置くのさ。だから嫁さん、オレが今日は脱穀へ行くってわかると、その日の4時以降は裏口から外へ出ようとしなかった。

昔、ソルトディーンで脱穀の作業をやったことがあったが、そんなときも70匹ぐらいクマネズミがいて、オレが帰り支度をしてると、ヤツはいつものように品定めをして、デケエヤツを咥えて一緒に家路についた。途中、ハリエニシダの生い茂った野っ原を通らなきゃならなかったんだが、気がついたらラフルズのヤツ、急に穴を掘り始めてやがる。で、オ

レはちょっと待ってやったのよ。穴が掘り上がると、ヤツはクマネズミをそんなかへ埋めて、ハリエニシダの藪のなかへ潜り込んで行った。

まるで気にも留めなかった。アイツが茂みのなかに飛び込んでいくんだ、いつものことだったからな。むしろ、おつかあにうめえウサギでも持って帰ってきてくれるんじゃないかねえかって期待してたさ。クマネズミじゃなくてよ。まあ、とにかくこれが、アイツの姿を見た最後さ。

父は辺りの茂みをくまなく探しました。口笛を吹き、名を呼びながら、その周囲の茂みもさらに広い範囲でも探し回りました。2、3時間、耳を澄ませ、その姿を探しましたが、見つからず、翌日もそのまた次の日も、連日そこへ戻って探し続けました。しかし、ラフルズが姿を現すことはなく、消息を絶った原因すら掴むことが出来ませんでした。

まったくの謎よ。まあ、大方ウサギかキツネの巣穴に潜り込んでって、戻ろうとしたときに、首輪が木の根っこに引っかかって動けなくなっちゃまったんじゃないかねえかと思うがな。

愛犬のなんとも悲しい末路を告げる物語ですが、父には耐えがたいことであつたものと思います。それから父は、狩りのとき犬を藪に放つ際には、必ず首輪を外してやっていたからね。あのときのことが忘れられなかったのでしょうか。

謝辞

今回も変わらず Copper family の面々、就中 Jon Dudley 氏には細かな描写やこの地方特有の事柄など多くの点についてご教示いただいた。記して感謝申し上げます。